

水稻の作柄に関する委員会（令和4年度第1回）の意見

1 気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 7月までの気温・日照時間等は、5月は北日本、東日本では高温、多照で推移したものの、西日本日本海側の降水量は平年をかなり下回った。

6月前半は全国的に低温、日照不足であったものの、6月後半以降は東日本、西日本中心に高温、多照で推移し、特に6月下旬は記録的な高温となった。

7月上旬以降も全国的に気温はおおむね平年を上回り推移したが、7月中旬には北日本から西日本の太平洋側中心に大雨となり、地域によっては記録的な豪雨となったほか、西日本の日照は平年を下回ったものの、北日本から東日本の日照は平年を上回った。

その後、8月上旬以降も全国的に気温はおおむね平年を上回り、特に西日本で高めに推移したものの、8月前半から北日本や東日本の日本海側中心に大雨となり、地域によって記録的な豪雨となったほか、日照は全国的に平年を下回る時期が多かった。

なお、9月上旬以降に予想される今後1か月程度の天候の見通しでは、気温は平年並み又は高い、日照時間は少ない又は平年並みと予想されているほか、9月上旬の台風で西日本では強風、東日本の日本海側ではフェーンが発生した地域もあった。

- (2) 本年の水稻は、6月前半の低温、日照不足、6月下旬の記録的な高温、7月中旬、8月前半からの大雨等に伴う日照不足が穂数・もみ数等与える影響や、7月から8月の高温、8月後半以降も続いた日照不足が登熟・品質等与える影響が懸念される。

また、大雨等による冠水等、台風による倒伏、フェーン等の影響も懸念されるほか、いもち病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想される地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯や遅場地帯ごとの生育ステージ、肥培管理、栽培品種等の違いによって、6月前半の低温、日照不足、6月下旬の記録的な高温、7月中旬、8月前半からの大雨等に伴う日照不足が穂数・もみ数等与える影響を見極めるとともに、8月から続く高温傾向かつ日照不足が登熟・品質等与える影響について留意する必要がある。
- (2) 7月中旬、8月前半からの大雨等による冠水等や9月上旬の台風による倒伏、フェーン等の被害が発生した地域では、登熟・品質等与える影響を見極めるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (3) いもち病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況にも留意する必要がある。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨 宮 宏 司 公益財団法人日本特産農産物協会 理事長
- 荒 井 裕見子 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究部門
スマート育種基盤研究領域 オーダーメイド育種基盤グループ 上級研究員
- 大 川 泰一郎 国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院
生物生産科学部門作物学教育研究分野 教授
- 萱 場 互 起 気象庁大気海洋部 気候情報課 予報官
- 齊 藤 邦 行 国立大学法人岡山大学 学術研究院環境生命科学学域 教授
- 山 岸 順 子 元国立大学法人東京大学大学院教授
- 吉 永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中日本農業研究センター
転換畑研究領域 領域長